力は人を守るために

霧崎俊哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
力は人を守るために

【Ｎコード】
Ｎ５１４９Ｗ

【作者名】
霧崎俊哉

【あらすじ】
転校前日に転校先の東京に着いた真田潤也は借りるためのマンションに行くために道を歩いていると１人の女性が三人の男に囲まれていた。
そこは狭い路地滅多に人は通らない所で彼女は脱がされそうになっているのを潤也は見つけた。
そして潤也は１人の女性を助けるために三人の男の中へと入っていった。

プロローグ

「おいおい姉ちゃん早く脱げよ」
「ちょっと　辞めてください　警察呼びますよ！」
女性は三人の男に囲まれていながらも強気で対処していたが女が男に勝てるはずもなく。
「ちっ！いいから早く脱げや！
「いやぁ、辞めて」
彼女が声を上げた瞬間に目の前にいた男が倒れてきた。
その背後には背が高く体が締まっていてショートカットの男の人が立っていた。
「おっ、おい大丈夫かぁ！？」
倒れた男はびくともしない。
「なぁ、お兄さんかた嫌がってる女の人を無理やり脱がせようとするなんて最低だな」
「なんだてめぇどこの奴だよ？」
「俺か？今日からこっちに来たばっかりでわからないんだよ」
彼はそう告げたよく見ると学生っぽく見える。

私も高校生だから同じ学校かなぁ？友達が転校生が来るとか言ってたし。「ざけんなよ兄ちゃん俺らにそんな口聞い生きて帰った奴はいねぇぜ！」
倒れた男以外の人がそういった。
そのすぐ後に彼らは金属バットを手に持って殴りかかる準備をした。
「ついにやるかぁ？」
高校生ぽい彼はそう言った。
「なめんなよ！ガキがぁ！」男二人は走り出し目の前にいる彼に殴りかかった」
「ふっ　ざこが、失せろ」

彼がそう言った瞬間に殴りかかって行った男二人は目の前に倒れていた。私に何があったか分からなかった。
すると助けてくれた彼は私に近づいて来た。
「大丈夫ですか？お姉さん？早くこの場から立ち去りましょう」
私は彼がそう言ったすぐ後に安心したのか気を失った。

プロローグ（後書き）

主人公は潤也で女性ではありませんからぁ

他に書いている彼女の為に出来ることも見てください。

彼女のその後

私の名前は中原里美(なかはらりみ)。
数時間ほど前に不良の男三人に囲まれて無理やりに脱がされそうになっていたのを見知らぬ男の子に助けてもらった。
「彼は誰だったんだろう？」
私は助けてもらった彼に、まだお礼もしていなかった。
「はぁ」
会って話をしたいなぁ。私は少し前に助かった安心感から気絶していて彼の顔も名前も見ていないのだ。
「まぁ考えていてもしょうがないし明日からも学校始まるから転校生が来ることを期待して帰ろ」
私は転校生に出会えることを期待して自分の家へ帰った。

彼女のその後（後書き）

これは助けられた彼女のその後について書いたもので本編に直接は関係ありません。

転校初日

「ふぅ　ここが白零陵(はくれいりょう)学園かぁ。結構でかいな」
俺は真田潤也。
今日からこの白零陵学院へ転校してきたんだ。
「おっ、そろそろ職員室に行かなきゃな　え～と職員室はどこだ？」
この学校、俺の推測だが東京ドーム３つ分位はあるぞ！
「誰かに聞くかぁ」
俺は誰かに聞くことにした。が、転校初日から遅刻は嫌なので少し早めに出てきたからまだあまり生徒が来てない。
「ふぅ　仕方ねぇ１人で探すか、こりゃ骨が折れそうだ！」俺はまず目の前の玄関の中へと入っていった。
「うわ！　なんて広さだ！本当に歩きすぎで骨折れるかも…」
「あっ　あの」
「うわぁ！」
突然後ろから声が聞こえた。「えーっと　うちの生徒じゃなさそうですねどこの学校の生徒ですか？」
後ろを振り返るとそこには、
髪が長くて、肌のいろは白く、足がスラっと伸びていて、体つきは高校生とは思えない程の体型をしていた。
「えっ、えーと　今日からこの学校に通う真田潤也です、よろしく」
やっぱり第一印象は大事だよな。と思った俺は悪印象をなるべく与えないようにするよう気おつけて挨拶を済ませた。
「そうですか、あなたが噂の…」
「うっ、噂？」
噂ってなんだ？「噂ってなに？」
俺は変な噂が流れてないか聞いた。
「あっ、いえ、　あなたに当てはまるか分かりませんが」
彼女は少し黙りを決めた。

おいおい何だよそんなに溜めなきゃいけなきゃいけないことなのか？なんか怖くなってきた。
「あの、言いたくなかったら別に」
「あっ、いえ　すいません。昨日ここから少し行った路地裏で男の方達三人が気絶していた所をパトロール中の警察官の方が見つけたんですよ」

ビクッ！今の言葉を聞いた瞬間、背筋に電流が走った。

「どうかしましたか？」
彼女は上目遣いで聞いてきた。
「いっ、いや何でも
続けて」
俺は聞くのが怖かったが続けてもらった。
「はい、その後に警察官の方が倒れてた理由を聞いたら。
なんでも昨日東京に来たばかりの男に殴り飛ばされたっつ言ったみたいで、それを聞いた警察は近くの学校全体に登下校の際は気おつけて
と連絡をいれたのです、それでこの学校に近々転校生が来るって聞いてるからその人じゃないかって噂がながれてるのよ」

それ俺のことじゃねぇかぁ！！！
「どうしたの？汗が尋常じゃないほど出てるけど…」
「あっあぁ　大丈夫だ、何でもない」まじでか！俺が昨日殴ったやつらが変な噂流したせいで俺めっちゃ悪者じゃん。
だからか、だからこの人の目線が少し冷たいのはそのためか。
「あの、本当に大丈夫ですか？」
「えっ　大丈夫　大丈夫」
あぁびっくりしたこんな噂が立ってたのか
実際俺は三人の不良を殴ったがあれは正当防衛だ気絶させるのはや

り過ぎたが女性に強姦はそれより重い罪だ。
俺は無実だぁ！！！

ふぅ
俺よ少し落ち着け大丈夫だ　　けっして咎(とが)められはしない
はずだ。
「そっ、それより職員室の場所を教えてくれないか？」
「あっ　はい。ここから真っ直ぐ行ったとこに階段があります。そこから左に少し行くと、ありますから」
彼女は素早くなおかつ簡潔に教えてくれた。
「ありがとう。せっかくだから聞いとくよ、君の名前は？」
私ですか？　私は志治島美春(しじしまみはる)です。よろしく」
彼女は淡々と名のった。「俺は、真田潤也だ　よろしく」
俺は簡単に挨拶をすませ握手をした。

そして俺は、職員室に向かった。

ーーーーーー
学校へ登校すると靴箱の近くで友達の美春がたっていた。

「美春ぅ　何やってるの？」
「あっ　里美　ちょっと噂の転校生が来ていて道を教えていたのよ」
「そうなんだぁ、やっぱり美春は優秀だね」
「なんで？」
「だって初対面の人に職員室の場所を教えれるなんて私には出来ないなぁ」
「大丈夫よ、私には出来ないことはあなたはできるじゃない」
「そうかなぁ？」

「そうよ、そろそろ時間だし教室へ行こう？」
「そうだね、じゃ　行こう」

転校初日（後書き）

ーーーーーー

→の後は里美の心情を書いて行きます 。

PS

誤字や脱字がやるかもしれませんがよろしくです。

新しい学校の職員室

コンコン。
「失礼します」
俺は緊張感が覚めないなか職員室のドアを開いた。
「おっ、君は見かけない顔だねぇ、転校生かい？」
職員室に入ったとたんに体育教師らしき人に話しかけられた。
「はっ！はい。よろしくお願いします」
俺は頭を下げ挨拶をした。
「君のクラスの担任は窓がはに座っている先生だ挨拶してきなさい」
体育教師はそう言って職員室から出ていった。
俺は体育教師に言われた通りに窓がはに座っている教師に話しかけた。
「あの、俺のクラスの担任先生ですか？」
俺は、女の先生だったため緊張感気味に言った。
「おはようございます。真田君、私はあなたのクラスの担任の清水（しみず）晴海（はるみ）です。よろしく」
なんだか若い先生だなぁ。俺はそう思いながら挨拶をした」
「では、一回学園長室に行って話をしましょう。着いてきて下さい」
清水先生はそう行って俺を学園長室へ案内した。

学園長室は少し重苦しい雰囲気を醸し出していて、また緊張感してきた。
「おはようございます。この度転校してきました。真田潤也と言います！よろしくお願いします！」
俺は少し声が高くなりながらも挨拶をした。
「おはようございます。私はこの白零陵学院の学園長の白雪孝夫（しらゆきたかお）と言います。真田君これからよろしく。

学園長室での話し

「では、挨拶もすんだ所で「真田君　教室へ行きましょう」
清水先生はそう言って学園長室を後にしようとした。　が
「真田君少し話をしたいんだが」
突然学園長が俺を呼んだ。
「清水先生は少し席を外して下さい」
「わかりました」
清水先生は学園長に一礼し学園長室を後にした。
しばしの沈黙が学園長室を支配した。
すると学園長が声を出した。
「君はこの学園に来た意味をしっているかね？」
おもむろに言い出した。　「えーっと。前の学校でヤンチャしたからですか？」俺は今自分が思い付く問題行動を言った。
「それも一概に無いとは言えない、だが別の理由がある」
「なんですか？」
俺は少し身震いした。
「実はこの学園は少し荒れているのだ。だから君みたいな感じの子はすぐに目をつけられるだろう」
学園長は深刻そうに話していた。
「それと、俺が転校してきた事が関係あるんですか？」
「関係はある。君にこの学園をまとめて欲しいのだ。　一般生徒じゃなくて良い　一部の不良をまとめて欲しい」
学園長は拳を握りしめ俺に頼みこんできた。
「わかり・・・ました。一部の不良だけで良いんですよね？」
俺は学園長に聞いた。
「あぁ、不良だけで良い一般生徒は生徒会長がまとめてくれているが、うちの学園の生徒会長は女子だ女子には男子を止めるのは難しいからな　頼む　不良をまとめてくれ」

学園長は俺に頭を下げて頼みこんだ。
「やり過ぎても知りませんよ？」
俺は最後の忠告をした。　「大丈夫だ」
学園長は承諾した。
「わかりました。病院送りが出ても知りませんよ？」俺は笑みを浮かべながら言った。
学園長は無言だった。それだけ本気なのだろう。　「失礼します」
俺はそう言って学園長室を後にした。

「何を話していたの？」
清水先生は学園長と話していた内容を聞いてきた。
「秘密です」
「そう　わかったわ」
先生はそう言いった。
そろそろ教室に着くは心の準備は大丈夫？
「はい、大丈夫です」
「そう」
俺が言ったのは緊張の裏返しだが俺は強気で教室へ向かった。

新しいクラス

そうこうしている間に俺が新しく加わるクラスの前に着ていた。
「心の準備は大丈夫？」
「はい！」
この先どんな事が待っていても必ず越えてみせる。
俺は変な意気込みを心のなかでいれた。
「私が入ってって言ったら入ってきてね」
「わかりました」

「まじで！」
「えぇー嘘～」
「てかさぁ」
「今日行こうぜ！」
等の元気な会話が廊下にも聞こえてくる。
げっ　元気なクラスだな
俺はそう思った。

「はーい、注目～
皆さんおはようございます」
「おはようございます！」
「うん、元気でよろしい　今日は先に出席を取ります。まぁいつものことながら
松下、宮崎、東條はサボりか・・・。後は全員いるな！」
「はぁーい！」
「では、皆さんにご報告があります。何とこのクラスに転校生が来ます」
「先生知ってます」

「あっはははははは」
何て元気なクラスなんだ。俺は少しビックリしていた前にいた学校ではこんな風景は見たことがなかったからだ。
「じゃあ、早速紹介します。入って」
さぁ
ここから俺の新しい高校生活が始まるのか！
「真田潤也です。よろしくお願いします」
たが
期待とは裏腹に俺を見た瞬間クラスの奴等は一気に態度を変え陰口を叩いてやがる。
「みんな～　陰口はやめなさい！聞きたい事があるなら直接彼に聞きなさいじゃあ真田君は窓側の空いている席に座ってくれる？」
「わかりました」
俺は気まずくなった生徒の中を歩いて窓側の席に着いた。

「えぇと、一時間目の授業をしたいが時間が二十分くらいしかないから自習にします。後言い忘れたけど彼こっちにきたばかりだから制服が来てないの。だから数日は私服で登校するからそこんとこよろしく！」
「はーい」
先生は何とか話をさせやすいように話題を作ってくれた。
「では、自習！」
と
先生がいった。
まぁ
分かりきっていることだが俺の生活事情とか聞いてくるやつはいなかった。

だが
一人だけは違った。
隣から急に
「こんにちは私は中原里美よろしくね」「あっ　あぁ」
俺は話しかけられたのに動揺したが挨拶を済ませた。

ふぅー。俺の仕事は不良どもをまとめることだし別にクラスのやつらと関わる必要はないか。

二十分はすぐに過ぎ休み時間になった。
さて
どうすっかなぁ。
俺が席を立ち上がった瞬間。

「おい！！転校生すこし顔貸せや」
「んあっ　別に良いけど」
なんで皆こんなに怯えているんだ？
まぁ
クラスメイトの動揺に動揺してしまった。

体育館裏で

俺は呼ばれたやつに付いていくと旧校舎的な所に連れてこられた。
「よし！ここら辺で良いだろう」
彼は止まり俺にこう告げた。
「ここじゃあ助けを求めても誰も助けに来ねぇぜ！！」彼はそう口にした。そうかこいつが不良か！
そいつに構っていたら
ザザッと音が聞こえた。回りを見ると目の前の不良の仲間であろう奴らに囲まれていた。
「はっ！これで逃げ場はねぇぜ！覚悟しな！」
と言うなり不良ども手に持っていた金属バットやら鉄パイプやらで殴りかかってきた。
まぁ　正直俺にとっては雑魚でしかない。
俺は殴りかかってきた男の一撃を避けなかった。案の定クリンヒット。
「ははは！避けれなかったのか？転校生！」
「ぬかせ、避けられなかったんじゃない。避けなかったんだ」
俺はそう言った。「何を強がってんだよ！」不良は怒鳴った。
「別に強がってなんかいないさ俺に傷ひとつ付けないで泣いて帰るのはなんか可哀想だったからな」
実際、奴らは雑魚の集まり、俺の相手ですらねぇ。
「強がってんなよ、雑魚がー！」
そう言って男は殴りかかってきた。
「雑魚はどっちだ？」
俺は笑いながら攻撃をかわし男の脇腹に右ストレートをくらわした。
ゴフっとゆう鈍い音がした後に男は倒れこんだ。「てめぇ、よくも石田さんを！許さねぇ！許さねぇぞ！」
そう言うなり一人の男は俺に向かって走ってきた。

「うせろ、雑魚が」
俺は向かってきた奴の攻撃をかわし奴の顎に左アッパーをくらわした。
アッパーを食らったやつは円を描くように飛び後ろのドラム缶へダイブした。
俺は服を正し、
「まだやるか？」俺は残った奴らに告げた。
「いえ、勘弁してください」
奴等はそう言って逃げていった。
「ふぅー。教室に戻るか」　俺は腕に巻いていた時計を見る。
「やべ　もうこんな時間か少し遊びすぎたかな？理由は後で考えよう。それより教室へダッシュ！」
俺は急ぎ教室へもどった。

二時間目を終えて　放課後（前書き）

里美の心情がかけなくてすいません？

二時間目を終えて　放課後

体育館裏に呼ばれた俺は急いで教室に戻った。
時間には間に合ったが教科書がまだ届いていないため隣の中原さんに見せてもらった。そして授業の終わりを知らせるチャイムがなりクラスの人達は席を立ち仲の良い人と話したりしていた。
俺は別に話したりする相手も居ないから椅子に座ってボーッとしていた。
「ねぇ、真田君授業はどうだった？」
「えっ？あぁなかなか楽しそうじゃないか」
「でしょ！でしょ！内の学校の先生はユニークな先生が多いのよ」
隣の中原さんは楽しそうに言った。
ユニークねぇ、ある意味ユニークな先生は多いな。

そうこう話しているうちに休み時間が終わり
次の授業も次々とこなしていきついに放課後になった。
さて、そろそろ帰るか。俺がそう思った矢先。ピンポンパンポ～ン。
二年二組、真田君
二年二組、中原さん
二年三組、志治島さん
まだ
校内にいましたら職員室に来てください。
とアナウンスが終わり職員室に向かおうとした。すると
「真田君も呼ばれたね、一緒に行こうよ！」
「あっ・・・あぁ」
俺は流れに押されて一緒にいくはめになった。

「あっ！三春～！」
廊下を歩いていると急に中原さんは走り出した。　だが三春？どこ

かで聞いたことのある名前だな？
あっ！もしかして職員室の場所を教えてくた人か！
「里美は今職員室に行くとこ？」
「うん！今真田君と一緒に行くところなんだ～！」
急に紹介されて少しキョドった。
「また会ったはね」
「あぁ」
「あれ？二人ってもう知り合い？」
彼女は少しビックリしていた。「何で三春は真田君の事知ってるの？」彼女は不思議そうに聞いてきた。
「あぁ、俺が職員室を探していていたら偶然に通りかかった志治島さんが教えてくれたんだ」
俺は説明した。
「そうなんだぁ！あぁだから朝に三春が下駄箱前にいたんだぁ。
彼女は疑問が晴れたのか元気な顔になった。
「まぁとりあえず職員室に行きましょう」
「うん！」
「あぁ」
俺と彼女は、はもって返事をして職員室に向かった。

学園長からの依頼（前書き）

多分これはもうすぐで打ち切ります。

学園長からの依頼

「失礼します」
俺たちは志治島さんを先頭に職員室へ入った。

「おっ！来たか。学園長が呼んでいる着いてこい」
俺がこの学園で一番最初に出会った体育教師が学園長室に案内してくれた。

「皆さん来ましたか」
学園長が俺達にきずいた。「では私は失礼します」そう言って体育教師は出ていった。
「君たちに来てもらったのは中原さんが不良に絡まれた件についてだ」
それを聞いた瞬間に中原さんの急変した。
体の震えを手で押さえつけ歯を食いしばり顔が真っ青になりその場にしゃがみこんだ。
「ちょっと！里美大丈夫！？」志治島さんは中原さんの態度の急変したことに対処出来ていなかったが彼女なり中原さんに声をかけていた。
「本当は気分が落ち着いたら話そうと思ったが今は時間が無いのだわかってくれ」「時間が無いってどうゆうことですか？」
志治島さんが聞いた
「仕方がないな教えよう」学園長が思い口を開いた「今月に開校記念日があるだろ？」
「はい…」
「その日に近場の学校の不良共とうちの学校の不良が喧嘩をするようだ」学園長は恐ろしいものを口にするかのように眉間にシワを寄せて話し始めた。「今までも何度か有ったのだが目を瞑っていたが

今回は大規模なのだ」
＞大規模＜
その言葉に潤也が少し反応した。「もしかしてその為に僕を呼んだのですか？」
潤也は少し怒りを見せていた。
学園長は首を横に振った。
「確かに君にはこの学校の不良共をまとめてくれと頼んでいる。実際にこの学校での問題行動は、ほぼ無いに等しい。だがこの事が先ほど言ったことの遠回りにして言ったわけじゃない」
学園長が淡々と話すなか納得できないでいる志治島さんは学園長に疑問をぶつけた
「学園長」
「なんだね？」
「先ほど真田君はこの為によんだのかと言いましたよね？」
「あぁ」
「それはどうゆうことですか？一般生徒をたかが不良の喧嘩に投げ入れると言うのですか！？」
彼女は声を張り上げた。「たかが喧嘩？」「はい！所詮不良の喧嘩など自分を強くみせるための言わば強がりみたいなものです！それに真田君には噂が立っていましたが今日1日の生活態度でわかりました。
彼は噂されていた人より不良じゃありません。確かに見た目で判断したら不良っぽいですが彼は人を悲しませるような人ではありません！」
彼女は力説した。俺の過去を知らない彼女の声は学園長室に響いていた。

告げられた事

「今から数年前ある中学校の男子がある不良の巣窟の学校へ殴りこんだ」潤也は少し後ずさりした。
「心当たりがあるみたいだね」
と校長が潤也にしてきした。
潤也が後ずさりした理由それは言うまでもないが殴りこんだある中学生というのが潤也。本人なのだ。ーーーーー

昔
ある中学校の中学生が不良の巣窟に単身で乗り込んだのは地元だけだがニュースになった。
彼の名は真田潤也
乗り込んだ動機は喧嘩がしたかったとゆう動機だ。今となっては幻の歴史。なぜか。
それは一時間で外に出てきた潤也に警察が尋問したら
「終わった」
とだけ言い残してその場に倒れたという。
その後警察が学校内に入ったら絶句したらしい。当然だろう
なぜなら一階から三階までに全校の不良が廊下に次々と倒れていたのだから。

その後に真田潤也の歴史は不良の中で語られていった。

ーーーーー

今の話を学園長は名前を隠して述べた。
「なぜ今その話をおっしゃるんですか？」
志治島さんが学園長に聞いた。

「それは・・・」
学園長が話そうとしようとすると潤也がサッと手をだし制止した。
志治島さんと中原さんは「えっ？」という声を上げて潤也を見た。
「ここまで言われたら言うしかないか」
潤也は意を決していった。
「志治島さん・中原さん。聞いてくれ」
「うん」
「えぇ」
二人はハモって言った。
「さっき学園長が言った話は俺の事だ！」
二人は唖然としていたが潤也は続けた。「昔、俺は荒れていた。今以上に・・・な
昔の俺は喧嘩をしたくて仕方がなかった。それで近場の学校の不良に勝負を挑み勝っていった。

そうしていくうちに中学生では俺と戦えるやつが居なくなったから高校に標的を変えた。
殴って・殴って・殴って。何人もの奴を病院送りにしてきた。
そして俺はこの地域で一番の不良の巣窟＞四二名高校＜で挑戦した。
そして俺は勝った。
体がボロボロになりながらも四二名高校で最強の奴を倒した」

「ちょっと良いかしら？」志治島さんが質問をしてきた。
「なに？」
「今の話を聞いていると昔のあなたと今のあなたの性格が一致していないのだけれど」
「あぁそうだな。今話す」　「わかったわ」

「一週間たった後に高校生の奴等がやり返しをかけに来た。
しかも学校に。」俺は声のトーン少し下げた。

「奴等は外で俺を呼んでいた、だが俺は外へは出なかった。相手にしなかった。そうしていたら奴等は学校の中に無断で入ってきた。奴等は俺を探し回っていた。入ったクラスに俺が居なかったら腹いせに生徒を殴っていった」
「教師は！？教師は何をしていたのよ！」
志治島さんは叫んだ。
「教師は助けなかった・・・いや正しくは助けれなかったんだ」
「なぜ？」
「奴等は教室を探し回る前に教師を潰していた。中には意識不明な教師もいた」
「そんなやりすぎよ！」
「あぁ。奴等はやり過ぎた、生徒のほとんどが病院送りになった。俺が調子にのって喧嘩をしなかったせいでたくさんの人を泣かしていた。
その後に俺は怒りに任せて奴等をぶちのめした。俺は決めた。
ただの暴力は先のような事を繰り返す。だから俺は暴力を振るうのは誰か人を・・・・・大切な人を守るために振るうと」
俺は叫んでいたそれはまさに改めて誓ったような感じだった。
「はい、これ使って」
志治島さんは俺にハンカチを差し出した。
俺は泣いていた。
多分悲しかったんじゃない怒りでながれていたんだろう。「学園長！」
「なんだね？」
「当日までの5日間、学校を休ませてください。
お願いします」
俺は学園長に頭を下げて頼み込んだ。「わかった」
学園長はすぐに承諾してくれた。
「では失礼します！」

俺は学園長に頭を下げ学園長室を後にした。

ーーーーー

「学園長」

「なんだね志治島くん？」　里美の前で不良の話はしては行けないってわかってますでしょ？」「あぁ。知っているが」

学園長はすぐに答えを返した。

「ではなぜ！・・・なぜ！」

「中原くんは前に教われただろ？」

「はい、言ってましたね」　「推測だが中原くんを助けたのは真田潤也。彼だ」

「「え？」」

志治島さんとその場にいた中原さんも一緒に驚いた。

「なぜ真田くんが？彼は・・・・・は！」

「そうだ。彼は今昔とは違う、誰かを守るなら暴力を振るうそれが彼だ

しかも彼が

越してきたのは中原くんが襲われた日と同じだ。

そして中原くんが襲われた場所と彼の住んでいるマンションの場所が以外に近いのだ

しかも近道の道を通ればその場所に着く」

学園長の憶測は的を獲ていた。

潤也の住んでるマンションから強姦現場まで早くて3分、遅くても5分で着ける。

彼が偶然通って彼女を助けるのは可能である。

「では彼に期待しときましょう。里美やこの学園為にも」

「そうだな」

「では失礼します」

志治島さんはドアの前へ行き頭を下げ学園長室を後にした。

「ふぅ、さぁ真田君は奴等を止めれるか？」

学園長は不吉な笑みを浮かべ仕事へ取りかかった。

強化期間　ＤＡＹ１　邪魔者

翌日。
俺は地元に戻っていた。周りには「もう帰ってきたの？」と笑いながら言われたが気にせず昔お世話になった道場へ向かった。＞真田道場＜
察する人もいるだろうが此処は俺の親父が師範をしている道場だ。
「すぐ戻ってきたら起こられるかな」俺はため息を付き道場ではなくその奥の家の方の玄関へ向かった。
ガラガラガラ。
「ただいま！母さんいる？」
「あれ！潤也かい！どうしたの？あっちの学校は？」　「あぁ、ちょっと理由が有って戻ってきたんだ」
「あっ！またケンカしたのかい？バカじゃないのかい」
「まぁ
そんなもん。親父いるか？」
「お父さん？今はまだ稽古をつけてる時間だから道場の方じゃないかしら？」「わかった」
俺は荷物を茶の間に置き道場へ向かった。
ーーーーーーーー
道場の入り口の前に着くと中が騒々しい、何事かと見てみると道場破りが来ていた。
まぁ
相手は破りと例えるよりは、ただ戦いをしたいだけみたいだった。
親父は帰ってもらうよう説得してるが道場破りは聞く耳を持たない。
そうこうしている内に突然道場破りは親父の顔面を殴り付けた。
「！！！！」
周りの道場の人も唖然としている。
だが不思議だ。

道場の師範がああも簡単にしかも顔面にパンチを喰らうはずがない。
親父は殴られてもやり返さずただ説得をしていた。
すると道場破りは俺の方を向いて不吉な笑みを浮かべた。そして向かってきた。
「おい坊主！俺とタイマンはれ！」
奴（道場破り）は俺に向かって勝負を申し込んできた。
「潤也！潤也なのか！」
「おっ、おいっす。親父」　「潤也殿！」
周りの人には何人かは顔見知りも居て俺の名を知っている。
「おい！俺を無視すんなよ！ごら！」
「わかった！落ち着けタイマンはってやるから」
「おっ、おい潤也。むりするな」親父は俺を心配してくれてるのだろう喧嘩はしないでくれと言ってくれた。
だが俺は逆に昂ってきた。こんなに優しい親父を殴った奴を許しておくわけにはいかない。
「大丈夫だ親父よ、見ていな」
「よし決まりだ早くこっちこい！」

ーーーーーーー
真田道場の中は試合が六ヶ所で行える位に広い。だからこの中でどれだけ暴れても余り支障はない。

俺と奴は畳の線を前に対峙していた。親父と道場の生徒は端に。
奴は余裕の構えをしてこっちを見ていた。
「今なら逃げることできますよ」
俺はわざと奴を挑発した。
「それはこっちの台詞だ！」そうゆうなり奴は走って向かってきた。
奴との距離５０、４０、３０、２０、１０と縮まって来た。
俺は少し息を吐いて奴を見た。
奴は右ストレートを仕掛けてきた。俺はそれを軽く交わし腹部へ右

膝蹴り。奴は少しよろけたがまた向かってきた。
俺は今の一撃で判断できた。（奴は弱い）
そう思い俺はズボンに手を入れながら奴のパンチを避けた。
「なめてんのか？ああ！？」　奴は左ストレートを俺の顔面目掛けて仕掛けてきた。俺は後ろへ体を反り奴が振り切る前に左キックを奴の腹部へお見舞いした。
「グハッ！」と奴は声を上げ倒れた。
「終わりか」
俺は奴へ背を向けた瞬間に「まだだ！」奴は弱々しい声で言った。
「まだって言ったってもうその体じゃ動けないだろうし」
「まだだ！って言ってんだろ！」
奴は立ち上がった。
「わかったって！でも次は肋折(あばら)るからね」
俺は笑いながらいった。「このガキ風情が！」
奴は左ストレートを顔面へ仕掛けてきた。
俺はそれを受け止め、左手で奴の腕を掴んで空いた右手で右の肋に向かって右ストレートを仕掛けた。
それは見事命中。
奴の体からは
バキバキ！という音が道場全体に広がっていた。
「うわぁ！げほ！げほ！」
奴は呻きながら再び床に倒れた。
「誰か救急車を呼んでください」俺はそう言って奴を担いで道場の隅へ寝かした。数分後救急車が到着して奴を病院へ搬送した。

ーーーーーーーー
ある程度道場の練習を見て一回部屋に戻った。
部屋はまだこの家に住んでいた頃のままだ。
まぁ
本や勉強道具その他は引っ越した家にあるため部屋に有るのはベッ

ドと昔の写真位だ。
俺は部屋を少し見回りベッドに伏せた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5149w/

力は人を守るために

2011年10月19日17時12分発行